

高松市生涯学習センター 生涯学習推進事業 [企業との連携事業 (まなび CAN・CSR 教室)]
「お墓ってなあーに？」を開催しました

平成26年2月21日に(株)三好石材との共催事業による講座「お墓ってなあーに？」を開催しました。



まず初めに、お墓には「終の棲家 (亡くなってからの家)」や「お骨 (焼骨) を納める」などの機能があるが、これはお墓の本質ではありません。お墓の本質は、亡くなった人と生きている人、つまり、御先祖様と子孫である我々が幸せを交換するもので、お墓はそのシンボルであることをこの講座で伝えたいとの講師の発言でスタートしました。

その後、お墓の本質についての理解を深めるため、「人類としての初めての埋葬」、「なぜ、お墓は石なのか」、「お墓の意味」、「日本人の靈魂観」、「仏教伝来と日本の葬送」及び「お墓は幸せのシンボル: その構図について」について講師の見解なり説明がありました。

「なぜ、お墓は石なのか」や「お墓の意味」では、記紀神話の伊耶那岐命と伊耶那美命の話に出てくる黄泉の国の出口を塞いだ「千引の石」がお墓の原点であり墓石の始まりであることや、お墓には①地下の死者の国の出口を塞ぐ、②あの世とこの世の境界、③死者と生者が会話をする仲立ちという三つの意味があるとお話がありました。

「日本人の靈魂観」では、人が亡くなると肉体と霊が分離するという考え方は、中国古代の礼に関する諸説を集めた「礼記」の中の「魂気は天にかえり、形魄は地にかえる」を起源としていることや、亡くなった直後の分離した魂 (霊) は、長い時間を経て最終的に氏神様となること、そして、日本には秋祭りなどの形でその氏神様を集落全体や各家で祭る風習が残っているとお話がありました。

「仏教伝来と日本の葬送」では、仏教伝来以前から、日本には亡くなった人を祭る民族信仰があり、祖先を大事にする固有信仰があったが、仏教はそれを先祖供養という形で体系化し発展してきたと考えられるとお話がありました。

最後に「お墓は幸せのシンボル: その構図について」では、例えば浄土仏教の視点から言えば、仏様が善根功德で亡くなった人を「ホトケ」にして浄土に連れて行き、そして、子孫である我々が「ホトケ」になった先祖の「ホトケ」をお参りすることによって、我々に幸せを与えてくれるという構図となっています。このような面からも、お墓は御先祖様と子孫である我々が幸せを交換する場所であり、シンボルであるとお話がありました。

お墓に対する考え方は、宗教の違いなどによっても大きく異なるものと思いますが、今回の講座は、身近でありながら日ごろ余り考えることのないお墓やお墓参りについて、改めて各々がその意味を考えるよい機会となったものと思います。

